

社会福祉法人 訪問の家



「朋」のディスコダンス

富士山の雄姿がくっきりと見える高台、“横浜の田園調布”と住民が呼んでいる栄区の住宅街の真ん中に「朋」があります。

白いエレガントな建物と看板だけ見ると喫茶店かスナックみたいですが、「朋」の利用者は、自分で身の回りのことができない重い障害をもった人たちなのです。

鼻から管を入れている人、吸引器が離せない人……。

看板の「朋」は、友達の「とも」、共に生きる「とも」を意味しています。

朝、ボランティアが運転する自動車に乗って、障害をもった青年たちがつぎつぎと到着します。「おはようございます」「おはようございます」。スタッフの若々しい声が飛び交い、障害をもった青年たちを助け降ろします。利用者もスタッフも、みんな実に美しい笑顔をしています。

毎朝恒例のディスコダンスに誘われました。

一階のホールで、車いすにやっと支えられている青年たちが、スタッフ、近所のボランティアと踊ります。私は、ベッドに横たわっている一番重症の青年と組になって踊りました。ベッドには車がついているので、パートナーの青年をリズムに合わせてベッドごと動かすことができます。目を見交わし体を動かしていると、あっという間に十年来の友達のような気がしてくるから不思議です。

ホールの真ん中では、脳性まひの若者が、床に背中をつけたままクルクルと回る華麗な踊りを見せて、みんなから拍手を浴びています。

「朋」は、1979年、プレハブの小さな作業所として始まりました。15歳で養護学校を卒業するわが子を、「家だけの単調な日々」に閉じ込めたくない、施設にも入れたくない。そんな母親たちが、自作の手芸品を売って建築資金を工面したのが発端でした。

熱意に動かされ、120坪の土地を貸してくれる人が現われ、障害者地域作

業所建設補助金がつかまりました。

この女性たちがすごかったのは、作業所で満足しなかったことです。ミシンを踏み、作品を売り歩き、さらに2000万円の資金をつくって、市役所にお百度を踏みました。

施設長のソーシャルワーカー日浦美智江さんは、当時のことをこう書いています。

「重い障害をもって、きびしい条件の下に生きるこの青年たちに、おもいきり明るい、おもいきり中身の濃い青春の日々をつくってあげたい。健康管理の専門スタッフもほしい。彼らと若さをぶつけあう若いスタッフがたくさんほしい。動き回れる広さがほしい。緊張の毎日の中にいる母親たちを1日数時間でも解放してあげたい」

重い重複障害をもつ人には「収容施設」しか用意されていません。そこで、「精神薄弱者更正施設（通所）」として認可してもらうことを考えつきました。

国も県もはじめはしぶりました。

「歩けない人のための通所施設？非常識ですよ」

でも、露天商の手伝いまでした女性たちのねばりがついに通じたのでしょう。2200㎡の土地を市が無償で貸してくれることになったのです。しかもそこは、隣に保育園、小学校、中学校、すぐそばにスーパーやテニスコートもある一等地でした。

ところが、ここにまたひとつの難問が立ちはだかりました。

地元の自治会の役員会が市長に計画中止を申し入れたのです。会長は民生委員も兼ねている有力者でした。申し入れ書はこんなふうに書かれていました。

“横浜の田園調布”を目指して環境を高水準に維持、増進してきた地域には、この種の施設はなじまない。情緒ゆたかな子供を育てるには環境づくりに特別な配慮をすることが必要である。図書館や郷土資料館のような文化施設ならまだしも、こうした施設には受け入れ難い要素が多い

日浦さんたちは挫けず^{くじ}に、町の人々を説いて回りました。

支援の声が一方で湧き上がりました。住民の中に「わかくさの会」というボランティアの会ができました。

今、70人のメンバーが手分けして、朝夕の送迎、掃除、洗濯などで「朋」を助けています。

土曜の午後、「朋」のホールは、ミニコンサート、マジックショー、人形劇などの催しでにぎわいます。近所の人々、近くの特別養護老人ホームのお年寄りも集まってきます。

町の人々は、今は、こう言い始めています。
「朋って、私たちの文化センターみたいなんですよ」

『「寝たきり老人」のいる国いない国～真の豊かさへの挑戦』（ぶどう社）
（執筆、初版は1990年。ことし増刷され、31刷になりました）
以下は、「訪問の家」に広がった、いまの活動の風景です。



<http://www.houmon-no-ie.or.jp/> より